

倫理と包摂の再設計：起業家業界が他の業界と異なる点—— 未来を創造するための「起業家像」とは

「失敗」と「加害」の違い

起業家とは、本来リスクをとって社会をより良くする可能性を切り開く存在です。けれども、私たちが今メディアで見ている“起業家像”はどうでしょうか？

たとえば、過去にハラスメントや刑事罰を含む不正行為があったとされる人物が、何の説明責任も果たさないまま一線で活躍し有識者として、メディアの中心にいる。このような姿が日常化していませんか。

芸能界では、不祥事が発覚すれば多くの人が自粛し、時には表舞台を退きます。完全とはいえませんが、一定の倫理的応答が求められています。

それに対して、起業家業界では、加害そのもののまで“成長物語”として語られることがあります。ですが、挑戦に対する「失敗」と誰かの人生を潰す「加害」は同じではありません。更に加害者の擁護ばかり行われ、被害者の声は取り上げられず、被害者は人生を潰されたままキャリア形成できずに終わりを迎えています。

この構造を放置すれば、被害者は声を上げられず加害者や黙認者、被害に遭っていないもの(＝マイノリティ)だけが活躍できる社会が固定化されてしまいます。これはイノベーションの対極です。

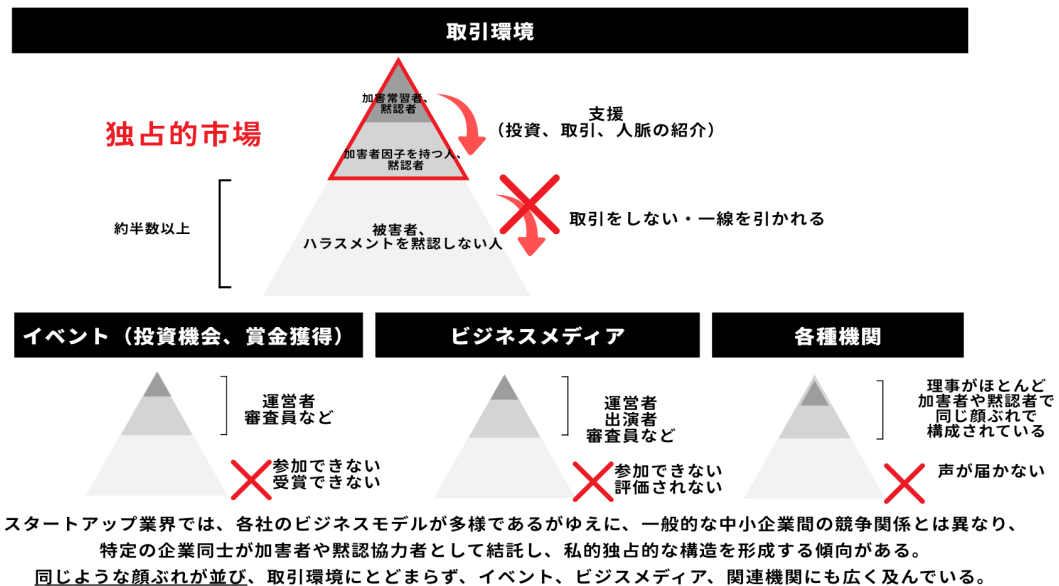
しかし、問題を放置したままの人が一線で活躍をすることによる弊害は様々ございます。参考ながらアメリカでは加害者は反省をすることを基本とした法律構成になっています。

●起業家の業界の構造

これは起業家と投資家のような取引間の話だけでなく、ビジネスメディア、イベント、各種機関を見てもほとんどが同じ企業の顔ぶれであることが問題のひとつです。ハラスメントをはじめとする不法行為を擁護・隠蔽することで独占的な市場の形成が行われてきました。

独占的な業界

©スタートアップユニオン



加害者の更生は必要ですが、一線で活躍することにより、下記の影響があると考えています。

(1) 加害行為の軽視、加害行為の助長

- 社会に対し「加害が問題ではない」といった誤認を招くおそれ
- 加害者や関係者が起業家の評価ランキングやイベントの審査員を行うなど不公正な競争社会の構築

例: ハラスメント等の加害行為、係争中の人物、不祥事を起こした人物が、DEIや犯罪をやめよう、起業家の再挑戦などの関連の記事を寄稿・登壇する等の事例。

例: 裁判中や係争中にも関わらず、最大のスタートアップイベントに運営として携わることができる。二次加害や裁判への優位的な影響、など

(2) 誤った「起業家像」の浸透

- 社会的責任を果たさない(賠償責任の不履行等)、または刑事罰受刑者ばかりがメディアやイベントで第一線で活躍をしている(一方で被害者は出演させない)
- 起業家は加害をした方が得をする、有名になれるような、「問題を乗り越えたヒーロー像」として扱われ、起業家像を誤認させる傾向

(3) 被害者は活躍できない社会

- 加害者が権力を握っていることにより被害者は淘汰され評価されない社会

これらの傾向は、結果として加害行為の助長や社会的規範の低下を引き起こす懸念があり、看過できない問題であると認識しております。

もし加害の責任を曖昧にしたまま表舞台に立ち続ければ、それは単なる「更生」ではなく、「黙認された優遇」になります。それは他者の尊厳を損ない、その結果生まれるのは、構造に依存した成功のシミュレーションです。

未来のために「構造」を再設計する

当コミュニティとしてはこうした社会的構造において問題視をしており、加害者や黙認者が連帯・擁護・隠蔽をする社会ではなく、被害者が立ち上がりキャリア形成をできる社会の実現を目指して活動しています。

失敗した人が立ち上がれる社会は業界問わず必要です。しかし本来優先されるのは、被害に遭った人が再び立ち上がり、活躍できる社会が必要です。それこそが、包摂的で、再設計可能な社会の在り方です。

加害者の更生も必要です。けれど、第一線で活躍することが更生の条件ではありません。まず優先すべきは被害者の救済でこれ以上被害者を増やさないことであり、被害者以上に加害者が評価される構造は、再設計されるべきです。

私たちは今、失敗から学び、加害を許容せず、誰もが共に未来をつくっていける設計を、ここから始めましょう。

©スタートアップユニオン